

《巻頭言》

学内共同利用施設としての分析センターの役割

学 長 堀 川 清 司

分析センターの沿革によると、昭和44（1969）年に本学内に理工学部共通機器運営委員会を発足させたことである。理工系の研究を推進するのに、かなり高度な機器を計測に用い、精度の高いデータを求めようとする要求が強くなっている。これらの機器は高価であり、講座研究室単独で保持することは実質的には不可能となってきている。そこで学部内共通の機器として整備し、それらを有効に活用するために委員会を発足させたものと思われる。その実績の成果として、昭和55（1980）年4月に分析センターの設置が認められた。

理工学部は、昭和51（1976）年5月25日付で実質的に理学部と工学部に分離されたので、分析センターは学内共同利用施設として位置づけられた。しかしながら、その建屋の完成は昭和60（1985）年4月まで待たねばならなかったため、完成時の関係者の喜びは非常に大きかったと思われる。その後種々の装置が導入され、現有の主要機器は14種類に及んでいる。私のような門外漢は、分析センターの「分析」から化学分析用の精密機器類を想像しがちである。分析センターはそのような意図から発足したものと思うが、現在設置されている機器類はもっと幅広い分野の研究者にも利用してもらえるもののように思える。先般、センター長の三田村教授とお話する機会があったが、その時に分析センターの英語名をより適切な名称に変更してはいかかとの意見も内部で出ているとのことであった。前向きに、かつ慎重に検討して下さるようお願いしたい。

さて分析センターの共同利用は極めて順調であると聞く。利用者の便を考慮して昭和62（1987）年度からは機器予約管理システムを稼働させ、共同利用の実をあげるように努めている。また利用者が効率よく利用できるように、各機器を常時整備しておくことは勿論のこと、利用者に対するガイダンスを実施している。限られたマンパワーでこれらの業務がなされているのであり、その御苦労は並大抵のことではないと思われる。このような努力に支えられて、本学構成員は研究の成果を着々と挙げているのである。

分析センターは部局長による管理委員会の下に、運営委員会及び専門委員会が設置されており、そこでの審議に基づいて運営されている。新しい装置の要求あり、また機器によっては購入してから既に20年近い年月を経過したものがあり、これらは何れは更新せねばならぬ時期が来ることであろう。このように多数の機器を整備するには多くの人手を要するが、概算要求で人員増を果たすことは容易ではない。このような厳しい条件の下で、分析センターの機能を十分に発揮させるためにはどのように対処するか、われわれにとって重い課題である。関係者の重大な関心に期待したい。